
日曜日、キミと太陽の下で

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日曜日、キミと太陽の下で

【Nコード】

N9916V

【作者名】

さら

【あらすじ】

夏休み最後の日曜日、僕は3時間かけてみのりに会いに行った。いつも元気なみのりと、ちょっと情けない僕。微妙な関係の僕たちが「幼なじみ」から「恋人」へ変わるにはどうしたらいいんだろう？そんな高校生二人の、ある晴れた一日のお話。

(前書き)

以前書いた「歩道橋の向こう側」というお話に出てくる二人の、その後のお話です。

「幼なじみ」と「恋人」の違いはなんだろう。

お互い「好き」って伝え合っているのに、僕とみのりの関係は「幼なじみ」のまま。

遠い昔に手をつないだ記憶はあるけれど、それ以上のコトはしたことがない。

幼い頃から見慣れたみのりを、抱きしめるとか、キスするとか、どうしても想像できないし、だいたいみのりがそれを望んでいるのかどうかも謎だ。

「葵っ！」

約束通り乗っていた先頭車両から降りると、僕を見つけたみのりが駆け寄ってきた。

「久しぶりっ」

「うん」

「やだなあ、もっと嬉しそうにできないかなあ」

みのりがそう言って、僕の前で苦笑いする。

「嬉しそうになって……どういうふうに？」

「『会いたかったよー』って、いきなり抱きしめるとかさ」

できるわけないだろ？ 夏休み最後の日曜日、こんなに人がごった返すホームの真ん中で……というか、誰も人がいない所でも、僕はできないと思うけど。

「あ、本気にした」

「してないって」

みのりがおかしそうに笑いながら、僕の前を歩き出す。

今日もみのりは元気だ。水玉模様のタンクトップとカーキ色のシヨートパンツ。日焼けして真っ黒な肌に、男の子みたいに短い髪の毛。

僕はそんなみのりの一步後ろを、追いかけるようについてゆく。

「どこに行こうか？」

「公園とかどう？ あたしお弁当作ってきたよ」

みのりは決断力と資金力のない僕を気づかって、今日もそう言うてくれた。

今から一年前の中三の夏。「幼なじみ」のみのりは、親の都合で静岡に引っ越した。

僕は横浜から鈍行列車に乗って、三時間かけてみのりに会いに行く。

だけど高校生の僕たちには、自由な時間もお金もない。

特にみのりは部活の練習が忙しかったから、僕たちが会えるのは、夏休みや冬休みのたった数日間だけ。

今日だって急にできたみのりの休みと、僕のバイトの休みが重なって、やっと会えることになったのだ。

「でね、その先輩、超モテるくせになんか抜けててねー」

みのりは高校でも野球を続けていた。

野球部でたった一人の女子部員であるみのりは、公式戦には出られない。

それでも体の大きな男子に交じって、同じ練習を続けているって
いうから、僕はみのりのことを密かに尊敬している。

並んで歩くと僕よりたくましく見えちゃうところが、ちょっぴり
残念なんだけど……。

夏の終わりにかけた空の下、駅から続く道を歩きながら、みのりは
たくさん話をした。

練習試合に初めて出させてもらったこと。

クラスにいるおかしな友達の話。

学校の近くのラーメン屋がめっちゃおいしいこと。

僕の知らないみのりの高校生活は、とても充実しているようだった。

「葵」

「うん？」

「あたしの話、つまらない？」

「そんなこと……ないよ」

ないけど……。

あんまりみのりの毎日が楽しそうで、そんなに楽しいなら僕になんか会わなくてもいいんじゃないかって思っちゃうだろ？

「あ、野球やってる……」

急にテンションの落ちたみのりが、僕の隣で立ち止まる。

駅周辺から少し歩くと、大きな川が流れていて、僕たちはその土手の上まで来ていた。

河原の小さなグラウンドでは、おじさん達が草野球をやっている。

「あれ、見に行こう」

みのりが前を向いたままそう言って、僕の手をつかみ強引に引く張る。

懐かしいような初めてのような、不思議なみのりの手の感触。

初めてつないだのはいつだったか、覚えていないくらいずっと前から、僕たちは一緒にいるのだ。

土手を少し下った草の上に座って、僕たちはぼんやりと草野球を眺めていた。

みのりはあれから黙り込んで、何もしゃべろうとしない。

空は青く晴れ渡り、緑の草が風に揺れる。真夏のような蒸し暑さはピークを過ぎ、僕たちを包む空気はどことなく爽やかだ。

だけど――僕はなぜだか泣きたい気分だった。

隣に座るみのりが近いようで遠い。

肩が触れ合うほど、僕たちはこんなに近くにいるのに……。

「あっ、打った！」
キンツという音と共に、みのりが反射的に立ち上がる。僕もつられてその横に立つ。

太ったおじさんの打った球が、僕たちと反対のレフト方向へ伸びてゆく。

その行方を追っていた僕の目の前に、突然みのりの顔が現れた。

「えっ」

唇に触れた柔らかな感触。

それはほんの一瞬の出来事だった。

野太い歓声が遠くに響く。

転がるボールを追いかける外野手。打ったおじさんは必死に走って、セカンドベースを踏む。

「ナイスバツティーン！」

みのりが両手を口元に当て大きな声で叫ぶ。

「あ……あの」

そんなみのりに恐る恐るつぶやく僕。

「今の……」

「葵のために、あたしの『初めて』とつといたんだから。ありがとう
く思ってよねっ」

僕を見ないままそう言って、みのりはペットボトルのキャップを開ける。

「だけど……その手は小さく震えていて……」。

ドギマギしているのは僕だけじゃないってわかったら、みのりのことがものすごく可愛く思えてきた。

「あのさあ」

「なによ？」

ぶっきらぼうに言いながら、みのりはペットボトルに口をつける。

「なんか、お腹すかない？」

その言葉に、みのはゆっくりと僕に振り向く。

「みのが作ってくれた弁当、食べたいなあ……なんて」

眩しい陽射しの中で、みのはの顔がぱあっと輝く。

「どうせほとんど、おぼさんが作ったんだろうけど」

「失礼ねっ！ あたし五時起きで作ったんだから」

みのがごそごとと弁当を取り出しふたを開く。

ちよっといびつなタコさんウインナーに、少し焦げた玉子焼き。

それを見ながらみのがつぶやく。

「なんだか……あたしばかり、葵のこと好きみたいで悔しい」

「そんなことないよ」

ウインナーをつまんでパクっと口に入れる。

「僕も……さっきまで、そう思ってたから」

おじさんたちの珍プレーを眺めながら、太陽の下で弁当を食べた。

みのは僕の隣で嬉しそうに笑っている。

うん。こういうの、もしかしてすごくいいかもしれない。

もやもやした不安な気持ちは、もうどこかに消えていた。

帰りの電車を待つホームで、僕はみのりに言う。

「また会いに来るから」

「今度はあたしが会いに行くよ」

泣きそうな笑顔でみのりが言うから、なんだか僕まで泣きたくなる。

上り電車が僕たちのホームに滑り込んできた。

みのりに「じゃあ」って言って背中を向ける。

そんな僕のTシャツの裾を、みのりがぎゅっとひっぱった。

「もっと名残惜しそうにできないの？」

「名残惜しそうって……どういうふうに？」

「だから……ほっぺに『チュッ』ってするとかさ」

電車のドアが開いて、たくさんのお客様が降りてくる。発車のアナウンスがホームに響く。

「なんてね。冗談……」

みのりの声をさえぎるように、素早くその唇にキスをした。

電車のドアが静かに閉まる。

ゆっくりと動き出す窓越しに、みのりの驚いた顔が見える。

みのりは頬を真っ赤にして、そのあと僕に今日一番の笑顔を見せてくれた。

みのりとキスしてわかったこと。

どんなに離れていても、会える回数が少なくても、僕とみのりの気持ちはいつも近くにあるってこと。

こうやってゆっくり少しずつ、僕たちは「幼なじみ」から「恋人」へ、近づいていくのかもしれない。

僕の住む町に、めずらしく雪がちらついた日曜日。

少し遅れたバスから飛び降りると、駅の改札口に立つみのりの姿が見えた。

夏の終わりより少し伸びた髪。去年のクリスマスに僕があげたマフラ。あたりをきよろきよろ見回しながら、少し不安そうな顔で、みのりは僕のことを捜している。

このまま駆け寄って、いきなり抱きしめたら驚くだろうな……。そんなことを考えながら、僕はみのりの名前を呼ぶ。

「あっ、葵っ！」

僕を見つけたみのりが嬉しそうに手を振る。

片手に早起きして作った弁当を抱きしめ、小さい頃と変わらない

僕の大好きな笑顔で……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916v/>

日曜日、キミと太陽の下で

2011年8月21日11時34分発行